

授業者と共に創り上げる音楽アウトリーチ実践の実際

— 附属特別支援学校への音楽鑑賞教室の取り組みから —

瀧川 淳^{*1}・倉田沙耶香^{*2}・井上育美^{*3}・大森紗綾^{*3}・前田鳳子^{*3}
森下邦皇^{*3}・Andres Mora Corrales^{*4}

A report of a music outreach activity created with classroom teacher

— working with the special education school —

Jun TAKIKAWA, Sayaka KURATA, Ikumi INOUE, Saya OMORI, Fuko MAEDA,

Kunio MORISHITA and Andres Mora CORRALES

(Received October 31, 2018)

1. はじめに

本稿は、熊本大学大学院教育学研究科で開講する「音楽科教育学実践特論Ⅰ」（担当：瀧川淳）を履修した学生が本学附属特別支援学校（以下、原則として、附特と略記）の生徒たちを対象に開催した音楽アウトリーチ活動の実践報告である。

本講義の内容は、エリック・ブース著（久保田慶一監修）『ティーチング・アーティスト』の輪読を通して芸術家が音楽教育に携わる意義や方法について考えていくことをねらいとした。内訳は後述するが、今年度（H30）は5名が受講した。それぞれが演奏もしくは舞踊を専門とする学生たちであったことから単に前掲書を輪読するだけではなく、実際にアウトリーチ活動を組み立て実現する運びとなった。その対象となったのが附特高等部の生徒たちである。

本実践は、アウトリーチをする側が一方的に計画を立てて、学校側の授業時間を1時間借りてそれを披露するだけの音楽鑑賞会ではなく、アウトリーチの理論に基づいて演奏会を立案し、その途中、適宜、授業者と連携を取りながら、対象となる生徒たちの理解を深め、また生徒たちにも参加できる形を考え、さらには高等部音楽科の年間指導計画の中に位置づける形で開催された。この意味で、学校におけるアウトリーチ実践例として、ならびに特別支援学校を対象としたアウトリーチ実践の一例として、ここに報告する意義を認めることができるだろう。

なお、瀧川（1, 2.1, 6.1）、倉田（2.2, 6.2）、大森（3）、井上（4）、森下（5）、前田とAndres（8）がそれぞれ執筆を担当した。

2. 講義・授業について

2. 1. 「音楽科教育学実践特論Ⅰ」

「音楽科教育学実践特論Ⅰ」は、大学院1年生を対象に開講しており、基本的には音楽のフィールド研究を通して「音楽を教えること」について議論を中心に理解を深めることを目的としている。今年度はブースの著書の輪読を通して芸術家が教育現場に関わる様々な事例の検討を通して芸術家が教育に関わることの意味を考える講義を計画していた。前述したとおり、今年度は5名の受講によりスタートした。3名は器楽を専門とする院生、1名は体育科の院生、また1名はコスタリカでピアノ教育を学んだ教員研修留学生である。

以上のような講義計画から附特との音楽アウトリーチ活動に発展した理由は、以下の2点にある。まず筆者はH29年度より附特の音楽科と共同で研究を進めており、その中で、生徒たちが外に出て音楽を聞く機会がなかなかないという相談を受けていたこと。2点目に、今年度の学生がなにかしらのパフォーマンスを専門としていて、彼・彼女らによる演奏会の企画が可能だったことである。そこで附特の教員に相談し、アウトリーチを行うことが計画された。

講義では、ブースの著書を読み進めながら、それぞれの受講生の専門を最大に生かすことのできる演奏会が企画された。なお詳細は4.と5.に記されている。

*1 熊本大学大学院教育学研究科

*2 熊本大学教育学部附属特別支援学校

*3 熊本大学大学院教育学研究科院生

*4 教員研修留学生

2. 2. 特別支援学校高等部

附特高等部生徒は、1年生9人、2年生8人、3年生9人の26人（男子17人、女子9人）である。障害の種類は様々で程度は幅広く、『特別支援学校学習指導要領』の小学部1段階から高等部2段階に当たる。

2. 2. 1. 年間指導計画

音楽の年間時数は、例年35時間で設定されている。そのうち10時間を学校行事、残り25時間が授業として確保され、卒業までの75時間で学習指導要領を網羅するように年間指導計画を組み立てている。

附特では音楽を教科別の指導として教育課程に位置付けて3年目になる。これまでの2年間の学習内容を振り返ったところ、今年度の重点項目として「世界の音楽」（3時間計画）が挙げられた。

知的障害の生徒たちにとって、学習内容と生活との結びつきはとても重要である。「世界の音楽」との出会わせ方に工夫が必要であると考えた。

2. 2. 2. 「世界の音楽」鑑賞会について

世界の音楽をどう学ぶのかという点と、さらにもう1つ課題があった。知的障害の生徒は、演奏会やライブ等、生の音楽に触れる機会が少ないという点である。この2つの課題を解決するために大学と連携した音楽鑑賞会を計画した。

主体的・対話的で深い学びにつながる音楽鑑賞会となるように、アウトリーチする側（大学院生）と、適宜、連携を取りながら、生徒の実態を考慮した鑑賞会のもち方、鑑賞会で用いるスライドの検討等、細部まで配慮して進めた。話し合いを進めていく中で、①各国の音楽的な特徴を学べるように、手や足でリズムを刻みながら鑑賞する、②世界の音楽を体験的に学べるように、アウトリーチする側と合奏する。以上2つが柱としてまとまった。それを受け、本校で取り組む項目を3つに焦点化した。

2. 2. 3. 音楽鑑賞会へ向けての取組

1つ目は、鑑賞するための「聴く力」を育てることに取り組んだ。知覚を促すために拍や声質等、音楽の要素について学ぶ時間を設定した。さらに感受を深めるため、諸要素がもたらす音楽のイメージを比べる等、曲想と音楽構造の理解について学ぶ時間を設けた。

2つ目は、各国の音楽的特徴であるリズムを知ることである。当日用いるスライドを授業でも使用し、リズムの学習を行った。リズム譜を初めて見る生徒もいたため、音符や休符、付点等、基礎から学習した。

3つ目は、合奏できるように、器楽の練習をすることである。時数3時間を、練習1、リハーサル1、当日1時間に割り振った。本学教育学研究科特別支援学科の藤原志帆准教授に練習時の協力を依頼し、研究室の学生にも協力いただいた。リハーサルでは、アウトリーチする側にも来校してもらい、合わせる練習を行った。以上のように、本番に向けての事前学習と練習を計画的に進めて、音楽鑑賞会をむかえた。

3. 『ティーチング・アーティスト』について

本章では、本アウトリーチを計画実践するにあたり、その理論的根拠としたエリック・ブース著（久保田慶一監修）『ティーチング・アーティスト 音楽の世界に導く職業』（水曜社、2016）のアウトリーチを実践する際のポイントについて概観したい。

本書の主題であるティーチング・アーティスト（以下TAと略記）は、次の3点で表現される。「芸術を教えるだけでなく、芸術を通して人を教育することを、仕事の一部としている人」（p.10）であり、「21世紀の芸術家のモデルのひとつがTAで、それはまた教育分野における高度な参加型学習のモデル」でもあり、「アメリカにおいて芸術の未来を担うのがTA」（p.11）である。

つまりTAは、聴き手に単に音楽を聴かせるだけでなく、聴き手に何かを感じ取ろうとする能力を引き出し、楽しみ方を教える専門家であるといえる。そして今まで音楽になじみのない聴衆を引き込み、新たな音楽ファンを生み出す大事な役割も担っている。

では聴衆を音楽に引き込むためには、どうすればよいのだろうか。ここで著者はアート・コスタ（2000）を援用して思考習慣を紹介する。思考習慣とは、分岐点または難局にある、不可解あるいは不可思議な、答えがすぐには見つからない問題に直面した際に、知的に行動しようとする態度である（p.77）。音楽がわからないと感じるのも一つの思考習慣によるものと考えらるなら、それを变えることで、音楽と自分だけのつながりを発見できるようになる。そうすることで、音楽を受動的に聴くという姿勢から向きあう姿勢へと変化し、結果的に聴衆を引き込むことにつながる。そのために25のガイドラインを提示する。例えば、TAは、解釈を述べる前に、まず観察をすること（ガイドライン16）、また常にゆたかな質問をする、言い換えれば、答えがひとつの質問をしないこと（ガイドライン19）が求められる。

では、実際にワークショップを行う際の注意点と

は何か。それは、以下3つの要素を含むエントリポイントのひとつを見つけることである。1) 作品の中に、自分にとってとても興奮する点があること。2) 演奏者として音楽的に楽しい点があること (p.101)。3) 作品と場所に相応しいことである (p.102)。

今回の活動は、学校におけるアウトリーチ実践であるため、よい教育プログラム考案と学校活動の際の注意点も確認したい。

教育プログラムについては、聴者が自分なりの発見を出来るよう働きかけをする。その際、理解や興味のレベルは個人差がある点を理解する。また、すべてのメンバー参加が必須で、自分たちにとって熱意を感じられるものを選択する (pp.127-128)。

次に、学校活動では、準備や環境の状況が悪いことを想定しつつも、ベストを尽くす。単に音楽を伝えるだけでなく、楽しさを感じてくれるよう心がける (p.133)。子どもの反応がない場合も、彼らのありのままの感性に情熱を持って接する (p.134)。時間に余裕をもって行動し、プログラムの時間超過のないよう事前に要点をシンプルにまとめた資料を準備し、対象年齢に合わせた話し方で行う (p.135)。常に学校に失礼のないふるまい、気配りを大切にする。活動中は、集団をうまくマネジメントして、そのエネルギーに配慮する。学校のカリキュラムや教科内容に関連付けるなどをあげている (p.136)。上記以外にも、「子どもと家族のための教育演奏会 education / youth / family concerts」(以下、EYF)についてふれ、学校演奏での留意点を付け加えている。EYFは、わかっていない人向けのプログラムではないため、演奏する音楽レベルは下げず、聴衆のレベルを上げること (p.140)。あるテーマをもとに、全体的に一貫性のあるプログラム作成をすること。距離感を大切にわかりやすい口調で話すことである (p.142)。

学校では、子どもたちに「音楽との良い出会い」を与えるため、教師と企画者が「協力」し合い、どのように実施すれば全員の関心やニーズが得られるか、このパートナーシップがよりよいプログラム作りにつながると述べている。

4. 音楽アウトリーチを組み立てる

今回のアウトリーチでは、附特の生徒たちが普段過ごしている学校を飛び出し「外」の世界を知るきっかけになるようにと、テーマを『『新しい』世界と出会う』に定めた。聴き手である生徒たちにとっての新しい世界とはなにか。また「生徒にとって楽し

いクラスやワークショップにするためにはまず、「TA自身が楽しいと思えなくてはなりません」(p.31)の通り、アウトリーチする側が楽しいと思える音楽アウトリーチ活動とはなにか、という両面から考え、音楽アウトリーチ活動のプログラム作成に入った。

それぞれの専門を聴かせ魅了させるために、「ピアノ専門としてクラシックの原曲を」、「コスタリカ人としてコスタリカの音楽を」、「フラメンコ舞踏家としてフラメンコ舞踊と音楽を」という3つをメインにそれらが有機的に構成される選曲と進行でプログラミングを考えた。そしてプログラムに一貫性を持たせるために、ピアノ作品、コスタリカ音楽、フラメンコの3つを「世界のダンス」でつなぐことにした。また、音楽や踊りを見たり聴いたりするだけではなく、参加型学習として、生徒たちが附特の音楽授業で学習した曲と一緒に演奏する合奏も取り入れることにした。さらに、コスタリカの伝統楽器としても有名なマリンバの奏者の方を招いて演奏してもらった。以上の楽曲構成に加え、曲の紹介やそれぞれの国についてもスライドを利用し曲間に説明を行うこととして、それらを1時間程度のプログラムで組み立てた。

スライドの作成については、生徒たちによりよく伝わるよう、事前にリハーサルも兼ねて附特の先生方から改善点やアドバイスをもらう機会を設けた。主な改善点としては、生徒たちが見やすい文字の大きさや色の配置、世界地図で国の場所を示す時により正確に分かるように矢印を用いて示したり、拡大地図を出すなどである。また、附特の音楽の授業で学習した内容と関連したことをスライドに取り入れることで生徒たちにより興味関心を持たせることが出来ると考えた。さらに、受講生が実際に附特に行き、本番で合奏する予定の〈いろんな木の実〉を合同で練習した。生徒たちはとても元気で常に笑顔であり活気のある授業だった。さらに、本番までの1週間、入念なりハーサルやプログラムの進行を何度も確認し本番を行った。

5. 音楽アウトリーチを実践する

5. 1. アウトリーチの概要

日時：2018年7月5日(木) 13:00~14:00

場所：熊本大学教育学部音楽棟合奏室

対象：附特高等部の生徒26名。その他、特別支援学校の教諭、熊本大学音楽科の教員、学生が聴講した。

当日のプログラムは下記のとおりである。

- 1) リベルタンゴ《アルゼンチン》
- 2) トルコ行進曲《オーストリア》
- 3) グアナコス《コスタリカ》
- 4) ソロ・キエロ・カミナール《スペイン》
- 5) 無伴奏チェロ組曲第2番より〈プレリュード〉,
〈春風のささやき〉, 〈愛と〉 (マリンバ)
- 6) いろんな木の実 (合奏)
- 7) カルメン・ファンタジー《フランス・スペイン》

5. 2. 当日の進行

1) 〈リベルタンゴ〉 (ピアソラ作曲)

演奏：井上育美, 前田鳳子 (2台ピアノ)

アルゼンチンの作曲家アストル・ピアソラは「自由なタンゴ」という意味でこの曲を名付けた。全曲にわたり躍動するリズム感とエネルギーにあふれ、ピアソラの曲のなかでも特に人気の高い作品である。

①ねらい：普段感じたことのないタンゴというジャンルを聴くことで、これから始まる音楽鑑賞会のテーマに触れ、興味をもつ。

2) 〈トルコ行進曲〉 (モーツァルト作曲)

演奏：森下邦皇, Andres Mora Corrales (連弾)

ピアノソナタ第11番イ長調の第3楽章。4分の2拍子で書かれたこの楽章は、その独特な旋律やリズムゆえに、現在では単独で演奏されるほど広く親しまれている。

①ねらい：手を使って2拍子のリズムを感じ取る。

②内容 (以下のような導入と内容を行なったのち、曲を演奏した。)

[導入] スライドで、モーツァルトの出身や生涯について説明し、曲がつくられた背景を学習する。

[2拍子に合わせて曲を聴く] トルコ行進曲のリズムで、手で叩く部分をタン、休む部分をウンで言語化した。また、叩く部分を赤色、休む部分を青色で表し、視覚的に理解できるよう工夫した。

3) 〈グアナコス〉 (コスタリカの伝統音楽)

演奏：瀧川淳 (鍵盤ハーモニカ), Andres Mora Corrales (ピアノ)

グアナコスは、コスタリカのフォークソングの一つに数えられる。曲中には、コスタリカの伝統的リズムの「タンビト」が取り入れられている。

①ねらい：コスタリカ人の演奏でコスタリカの音楽に触れる。

②内容

[導入] スライドにて、コスタリカの位置や有名な食べ物・楽器などを紹介した。

[リズムに触れる] 3拍子のリズムを膝と手を使って表現する。

4) 〈ソロ・キエロ・カミナール〉

(パコ・デ・ルシア作曲)

演奏：大森紗綾 (フラメンコ舞踊), 瀧川淳 (鍵盤ハーモニカ), 森下邦皇 (ピアノ)

ジャズギタリストと競演を経て完成された6重奏での第1作、1981年のアルバムに収録される。

①ねらい：足と手を使って4拍子のリズムを感じ取る。

②内容

[導入] スライドにて、フラメンコをふくめた伝統を知る。

[リズムを知る] 1拍目は足踏み、2～4拍目は手拍子で叩く。気持ちが高ぶった時はオレと掛け声をかけることを伝える。

5) 無伴奏チェロ組曲第2番より〈プレリュード〉

(バッハ作曲)

〈春風のささやき〉, 〈愛と〉 (吉岡孝悦作曲)

演奏：神尾弥 (マリンバ: ゲスト奏者)

①ねらい：マリンバの音色に触れる。

②内容：マリンバがどんな楽器なのか説明する。マレットの素材によって音の質が変化することにつかせる。

6) 〈いろんな木の実〉 (西インド諸島民謡)

演奏：高等部生徒, 井上育美, 前田鳳子, 森下邦皇 (合奏)

〈いろんな木の実〉は、西インド諸島 (カリブ海の島々) の民謡であり、歌詞には、曲名通り様々な〈いろんな木の実〉が随所にちりばめられている。

①ねらい：世界の音楽を体験的に学ぶ。

②内容

[導入] 西インド諸島の場所や名産品を説明し、曲のイメージを膨らませる。

[合奏] 生徒それぞれ前もって決められた楽器で練習をする。ピアノ伴奏に合わせて、歌唱と楽器演奏を行う。

7) 〈カルメン・ファンタジー〉 (ビゼー作曲)

演奏：井上育美, 前田鳳子, 森下邦皇, Andres Mora Corrales (2台8手ピアノ)

ビゼー作曲のオペラ《カルメン》の中から第1幕の前奏曲、ハバネラ、第4幕へ間奏曲〈アラゴネーズ〉, 〈ジプシーの歌〉, の4曲をピアノ2台8手にアレンジした作品である。

①ねらい：2台ピアノと演奏者4人による8手ならではのアンサンブル、そしてダンスが組み合わさることで音楽により一体感が増し、情景をイメージしやすくする。

②内容

〔導入〕カルメンは、物語のある歌劇であることや演奏する場面の概要を説明する。

〔ハバネラに触れる〕曲中にハバネラのリズムが現れることを説明し、手拍子で参加できるようにした。

6. 全体の考察

6. 1. 学生の学び（大学院）

本項では、本講義を受講しアウトリーチを行った大学院生の学びについて考察した後、学校現場で展開されるアウトリーチ活動について若干の示唆を提示したい。受講生にとって本アウトリーチ活動を企画し実践することの意義は、以下の3点にまとめることができる。

- 1) 各自の専門を最大限に生かしたプログラミングの組み立て方法を知る。
- 2) 企画段階で、生徒たちに対する知識を深め、また指導者の助言を得る。
- 3) 企画段階で、生徒たちの事前活動に参加する。

単に曲を演奏することから、メッセージ性をもって演奏会を組み立て臨むことで観客により自分たちの意図を伝えることができる。また学校で行うアウトリーチは、学校側としては教育課程の一貫であることからカリキュラムのひとつに位置づけられることが望ましい。今回の試みでは、演奏家と授業者が入念な打ち合わせと調整を行い、さらには事前に生徒たちの実情も把握してからアウトリーチを行った。その結果、生徒たちのアンケートからは、組み立てた側と鑑賞した側がアウトリーチに感じた思いが一致したことがわかる。実践までの過程は、通常の演奏会よりも多くの時間を要したと思われるが、ブースが指摘するような双方が共に発見と楽しさがあった実践になったと言えるだろう。

6. 2. 生徒の学び（特別支援学校）

最後に資料として載せた8.「生徒たちの感想」からも音楽鑑賞会を終えて、演奏会に行ってみたいと思う生徒が増えたことに大きな価値があると考えられる。在学生や卒業生の余暇の過ごし方を見ると、好きな音楽を聴いたり、カラオケで歌ったりすることが多い。その選択肢の1つとして演奏会に向かう人が増えれば、社会参加の側面からも、生活がより豊かになるにちがいない。

5月の総合的な学習では、本学グローバルカレッジの教員と留学生の協力のもと諸外国について学ぶ機会があった。鑑賞会に参加してブラジルの音楽を思い出した生徒も多かった。教科横断的な視点からも、今回の実践は学びを深める取組であったと言えよう。

今後も学びを深めていくためには、生の音楽に触れる機会を今後ももち続けていくことが必要であろう。G（8.表「生徒のコメント」を参照）は、鑑賞会に参加して「ピアノが好きになりました。なんかすごかった」と感想を述べている。この生徒は、小学生まではピアノを習っていたが、途中でピアノが嫌いになった経験を持つ。音楽の授業では1年半かけて、やっと自分の考えを伝えたり、器楽等の表現活動に参加したりできるようになった。その生徒が音楽鑑賞会に参加し、生徒の感性の鋭さには、本当に驚かされる。

「本物を聴き、感じる」ことは最高の機会である。専門性の高い人たちが生み出す音楽だったからこそ、生徒の心に響き、突き動かす何かがあったのだと考える。それこそが音楽そのものがもつ価値であり、音楽を学ぶ意味なのだと感じた。だからこそ、今後も教科の本質が伝わる授業づくりに励んでいきたい。

7. 参考文献

- ・E. ブース著（久保田慶一監修・訳、大島路子、大類朋美訳）『ティーチング・アーティスト-音楽の世界に導く職業』水曜社、2016。
- ・T. ホール、A. マイヤー、D. ローズ著（バーンズ亀山静子訳）『学びのユニバーサルデザイン』東洋館出版社、2018。

8. 【資料】生徒たちの感想

以下は、「音楽鑑賞会はどうでしたか」という問いに対する附特の生徒たち24人の回答である。

ピアノやマリンバなどの楽器の音色や、フラメンコのダンスにおける足音についての感想の中には、「つよい」(H)「やさしい」(H)「きれい」(3人)といった言葉が用いられていた。また、フラメンコのダンスについて「炎をはなっている感じ」(W)だったという感想もあった。これらのコメントからもアウトリーチを通して、楽器の音色や、ダンスを間近で体験し、生徒たちそれぞれがそれらについて自由に感じることできた貴重な時間であったことがわかる。また、授業で学んだリズムを鑑賞会で音楽と一緒に体験したことや、様々な国の音楽にふれられたことについての感想があり、事前学習から鑑賞までを一連の流れとして実践できたことがわかる。

表 「生徒たちのコメント」

生徒	コメント（生徒の書いたままと記載）
A	いろな木がんばりました。ピアノよかったです。
B	ピアノがたのしかったです。いろな木の実のがっそうがたのしかったです。
C	ダンスのたのしかったです。とてもうれしかったです。えんそうがすこいです。がっきがんばりました。たのしくおねかいます。
D	もっきんをしました。ダンスがたのしかったです。
E	ダンスをおどってたのしかった。ピアノをきいてたのしかったです。てびょうしをしました。ピアノをきいてすごいとおもいました。
F	一緒にもっきんのやり方を覚えてできるようになりました。勉強を学びました。うれしかったです。手びょうし合わせてしました。
G	ピアノで小学生のときにピアノならってたなと思い出した事です。ピアノがすきになりました。
H	ピアノのはもりがやさしくてつよい音にしあわせをかんじました。マリンバはおとがやさしくてかんどうしました。
I	いろな木の実を合奏をしました。管さんと一緒に鉄きんをしました。生のフラメンコを見てカッコ良かったです。マリンバの音がきれいでした。音楽で学んだリズムを鑑賞会で出来ました。
J	色んな世界の音楽やダンスを見たり聞いたりして実際にやったりしてとても楽しめる演奏会でした。フラメンコでは、とても印象に残っておりまして。ダンスも派手で足に力強く入れて部屋中に響くほどの音でありながらダンスは美しくとても良かったです。
K	ダンスがおどってるのがカッコ良かったです。あといろな木の実で合奏をしたけど少しきんちょうしたけどでも、みんなでうまくできてうれしかったです。色んな国の事でべん強になりました。とてもきれいなピアノでびっくりしました。とても楽しい日になりました。
L	どれもすてきな曲で、とてもいやされました。特に「トルコ行進曲」は私が知っていた曲だったのでうれしかったです。（たぶんカルメンファンタジーもです。）「いろな木の実」の合奏では、ダンスを踊りました。楽しかったです。
M	音楽鑑賞会をみて、みなさんの演奏がとてもすてきでした。私がとくにすきな演奏は、マリンバの演奏とピアノの演奏です。マリンバ演奏ではまるで物語の世界にいるようでした。ピアノ演奏はまるでモーツァルトとバッハとベートーベンが楽しく演奏しているようでした。とても楽しかったです。
N	ぼくは、フラメンコのダンスをみて感動しました。足の音がすごかったです。カスタネットを貸してくださってありがとうございました。合奏はきんちょうしたけどすごかったです。
O	音楽鑑賞会では、リベルタンゴ、トルコ行進曲、クワナコス、ソロキエロカミナール、マリンバソロ、いろな木の実、カルメンファンタジーを聞けて、楽しかったです。僕は、マリンバソロと、カルメンファンタジーと、リベルタンゴと、いろな木の実をみんなで合奏したのが楽しかったです。
P	マリンバをきいていました。いろな木の実をみんなとしました。
Q	まりんばがすきでした。ふらめんこでおどりました。
R	いろな国の曲を聴いたり、手や足で一緒にリズムにのってしたりしました。いろな木の実では、全員で楽器を使ったり、歌ったりしてとても楽しかったです。カルメンファンタジーの劇は見たことあるけど、曲は聞いたことなかったの、こんな曲なんだなと思いました。劇も曲もとてもおもしろかったし、楽しかったです。
S	おんがくきけてうれしかったです。フラメンコのダンスがすごかったです。はじめてみました。みんなでいろな木のみを合そうして、楽しかったです。
T	マリンバでは細かい手さばきに感動しました。ダンスでは、細かいステップがすごいと思いました。ピアノではとなりの人と息を合わせるのは難しいと思いました。この音楽鑑賞会を聞いて演奏会に行ってみたいです。
U	ピアノがたのしかったです。フラメンコがうれしかったです。
V	ピアノがたのしかったです。マリンバもおもしろかったです。
W	フラメンコは振り付けがきれいがかっこよくてやっぱり炎をはなっている感じがありました。ピアノでいろな木の実を弾きましたが、リズムがはやかったのと、まだどこのキーを弾くのか全体的に把握していなかったの、リズムについていくのが難しかったです。音楽を聴いたり見たりしてすごいという言葉が強くてとても楽しかったです。
X	ピアノのきれいでした。いろな木の実をみんなで演奏したのが楽しかったです。